

分断社会における対話的自己の再構成を構想する： 二項対立の脱構築と多声的主体の生成に向けて

構想
2025, volume 11
79 - 83

加藤 誠也（株式会社ダイナアーツ・インターディベロップメント）

KATO Seiya (DYNAARTS INTERDEVELOPMENT LTD.)

キーワード： 差延，共時的深層，多声的対話

背景

現代社会は、政治的・文化的・倫理的領域において、かつてないほど先鋭化した分断の構造に覆われている。SNSを媒介とする言説空間では、支持／不支持、保守／リベラル、伝統／革新、あるいは加害／被害といった二項的区分が、当事者の自己理解や自己呈示にまで影響を与える。これらの対立軸は単なる意見の相違にとどまらず、「私はどの陣営に属するのか」「私はいかなる語りを自らに許すのか」といった主体の同一化プロセスそのものを規定し、自己の社会的投影を硬直化させている。

その背景には、個人が他者との相互的関係性を通じて自己を構成するプロセスが、安定的な対話の場を失い、単線化・二項化を促される状況がある。すなわち、自己を多層的・多声的に保つための余白が縮減し、単一のイデオロギー的アイデンティティへと圧縮される危険性が高まっている。こうした状況において、主体がいかにして複数の視座を保持し、他者性を内包しつつ自己を動的に再構成しうるかという問題は、心理学・哲学・社会理論を横断する重要な課題となる。

この問題の解明には、①二項対立を揺さぶる哲学的装置、②意味生成の深層構造を説明する理論、③主体の多声性を捉える心理学モデル、の三つが必要となる。本論考が以下に、J. デリダ、井筒俊彦、H. ハーマンスの三者の理論を統合的に扱う理由はここにある。

目的とリサーチ・クエスション

本論考の目的は、デリダの脱構築(deconstruction)、井筒俊彦の「意識／本質」論と共時論的構造、そしてハーマンスの対話的

自己論(DST: dialogical self theory)を総合し、分断社会における主体が二項対立的な自己投影の構造を乗り越えるための理論的モデルを提示することにある。

そのために以下の三点をリサーチ・クエスションとした。

二項対立が自己をどのように固定化し、社会的投影として作用するのかを分析すること。支持／不支持、敵／味方、善／悪といった単純化された対立軸が、自己の語りやアイデンティティの枠組みを拘束し、主体の語りの多様性を奪う仕組みを明らかにする。

脱構築と共時論の意味生成、および多声的自己の概念を統合し、主体の再構成モデルを理論的に提示すること。三つの理論が示す「差延(différance)」「深層の意味場」「位置交換的対話」を結びつけ、他者性を内在化する主体の再構築過程を描く。

分断を前提とする社会的条件下において、新たな主体形成の可能性を開く視座を提示すること。単なる二項対立の緩和や調停ではなく、主体そのものの構造的変容を問う立場から、分断社会を生き抜くための認識論的・実践的基盤を示す。

方法：分析と考察

本稿は、三つの理論的枠組みを統合的に読み替える理論研究の初期的論考であり、以下の三段階の手続きをもって進めるものである。

デリダ：二項対立の脱構築

本稿では、支持／不支持などの対立構造がどのように「中心／周縁」「正統／異端」といった階層化を伴って自己に内在化するのかを分析し、その構造を差延の観点から解体する。

差延(différance)は、デリダの脱構築思想

の核心概念として、言語的意味の成立条件と主体の構造そのものを根底から再考させる理論的契機を提供する。これは、「差異 (difference)」と「延期 (deferral)」の両義的作用を統合する造語であり、意味が他の語との関係によって生成されつつ、同時にその意味の確定が常に先送りされるという運動性を指す。言語的意味は各語の内部に自明に備わっているのではなく、他の語の連鎖的参照の中で相対的に立ち現れる。このとき、ある語の意味を説明しようとすれば必然的に別の語へ依存するため、意味は決して最終的安定点に到達しない。これが延期的作用である。同時に、意味が他の語との差異関係によって成立するという構造は、言語体系の内部で絶対的境界が固定されているわけではなく、文脈や使用状況によって柔軟に変動し続ける。これが差異的作用である。差延はこれら二つの作用を同時的かつ不可分の運動として提示し、言語が本質的に「決して完了しない意味の生成」を宿命づけられていることを示す。

この差延の概念は、言語の問題を超えて、主体のあり方や社会的意味形成の構造にも直接的含意をもつ。もし意味が常にズレを抱え、確定されえないのであれば、主体が依拠する中心的価値、アイデンティティ、規範もまた、固定的・本質的に存在するのではなく、差延の運動がつくり出す一時的な効果にすぎない。言い換えれば、主体が「本質」や「起源」とみなすものは、実際には差延の運動がつくる仮の安定に過ぎず、その背後には常に異質な可能性や抑圧された他者性が潜在している。この視点は、中心／周縁、正統／異端といった社会的階層化の構造についても同様である。これらの対立は本質的な必然ではなく、差延によって生成される「擬似的中心」によって維持される可変的秩序である。

したがって、差延は単なる言語哲学上の概念に留まらず、主体・社会・文化の「中心化」の作用を批判的に解体するための理論的レンズとして機能する。意味が常にズレ続け、他との関係によってのみ成立するという事実は、あらゆる権威的中心の自明性を揺るがし、異質性の回帰を促す契機となる。この観点から、差延は脱

構築の理論的基盤として不可欠であり、同時に自己理解や社会批判の方法として今日の意義を持ち続けていると考える。

井筒俊彦：意識／本質論と共時論的構造

社会的二項対立、支持／不支持、保守／リベラル、正統／異端といった政治的・文化的対立軸は、自己意識の深層に強い規定力をもつ。しかし井筒俊彦の「意識／本質」論の視点に立てば、こうした対立に囚われた自己は、本来の深層的な意味生成の場から切断され、きわめて貧困化した自己像を形成してしまう。井筒が示すように、「意識」は表層的・反省的な次元に属し、社会的言説や価値体系に媒介された象徴構造によって形づくられる。一方、「本質」は個別的・文化的差異を超えて、自己の根源的統一性が湧出する「場」であり、直接的な語りに乗らない深層の意味生成の層である。社会的二項対立は、この表層としての意識のレベルに過剰に侵入し、自己の語りを単純化された立場性へと強制的に収斂させる。その結果、自己は深層の本質の意味生成へアクセスする回路を閉ざし、社会的言説に同調するだけの一次元的主体へと縮減される。特に現代の政治的文脈では、対立軸に基づく自己定位は「私はどちら側か」という問いに押し縮められ、自己内部の曖昧性、矛盾、多声性が切断される。この切断こそが、井筒のいう「本質」への通路を閉ざす決定的契機となる。本質とは、明確な立場や判断に還元されるものではなく、むしろ自己の深部でゆらぎとして潜在し、異質な意味の萌芽が錯綜する場である。ところが二項対立に支配された自己意識は、このゆらぎを「矛盾」や「弱さ」として抑圧し、表層意識としての「一貫した立場性」を自己同一性の根拠としてしまう。この構造において、自己は言語的・象徴的に貧困化され、本質が孕む豊かな意味の潜勢力が発話の場に昇ってこなくなる。

他方、井筒の「共時論的構造」の概念を手がかりにすれば、こうした切断の構造を再編し、自己の多声性を回復する可能性が見えてくる。共時論的構造とは、異なる文化的意味層や宗教的象徴体系が「時間的継起ではなく同時に」

響き合うような深層の意味空間である。ここでは、意味は直線的・演繹的に形成されるのではなく、複数の声・複数の世界観が重なり合い、相互参照しながら生成する。これを自己へ適用すると、単一の政治的立場や社会的分類に回収されない、多層的かつ共鳴的な自己の構造が立ち上がるはずである。

自己内部には、社会的役割としての声、歴史的経験から生じた声、倫理的感受性としての声、さらには言語化されない直観や沈黙としての声が共時的に共存している。共時論的構造を自己理解に導入することは、これら多様な声に耳を澄ませ、その相互響鳴の過程を自己形成の中心に据えることである。そうすることで、二項対立がつくり出す単純化された意識では捉えられない、本質レベルの意味生成が再び作動し始める。つまり、対立軸を超えた自己の深層の統一性は、多声性の回復によって初めて再発見されるのである。

この観点から、自己は本来、社会的対立に還元されることのない「響きの場」として理解されるべきであり、井筒の理論は、分断社会の中で単純化されてしまった自己を再び多元的で豊かな意味生成へと開くための重要な哲学の手がかりを提供すると考える。

ハーマンス：対話的自己論と多声性の再編

ハーマンスの対話的自己論によれば、自己とは単一の統合主体ではなく、複数の「位置(position)」が相互に語り合い、競合し、ときに協働する動的な多声的構造として理解される。この理論に照らすと、社会的対立、支持／不支持、保守／革新、内集団／外集団といった二極化した価値枠組みが個人の自己内部に深く浸透するとき、自己の位置の多様性が削ぎ落とされ、「唯一正当な声」へと収束する危険が生じる。社会的対立は自己の語りに二項的な枠組みを強制し、他の立場や感情、経験を「矛盾」「不一致」「裏切り」として排除するため、自己は本来備えている多元的な語りの可能性を失う。このとき、自己内部の複数の位置は沈黙させられ、支配的な位置、社会的規範や集団的アイデンティティに一致する声が主導権を握るこ

とで、語りは教条化し、自己記述が硬直化する。こうして自己は、ハーマンスがいう「多声的対話空間」を閉ざし、単一声的でイデオロギ的な構造へと縮減される。

しかし対話的自己論は、こうした単一化の力に対抗しうる自己再構成のプロセスを示唆している。それは、自己内部の位置間に「相互翻訳(mutual translation)」を促すことである。位置とは、それぞれ固有の語彙、価値観、情動構造をもつ語りの場であり、一つの位置が他の位置の語りを理解しようとするとき、単なる情報の受け渡しではなく、意味の再編成を必要とする。相互翻訳とは、この異質な位置同士が互いの文脈を汲み取り、語りの前提をゆるやかに調整し、互いの声が通底可能な「共通の意味場」を創出する過程である。このプロセスは、単なる妥協や中庸ではなく、複数の位置が自己の内部で対話的に交差し、新たな意味構造を生成する創造的行為である。

位置間の相互翻訳が進むと、沈黙していた位置がふたたび語り出し、支配的な位置の絶対性が相対化される。たとえば、政治的立場としての位置が倫理的感受性の位置や家族経験の位置と対話するとき、自己は単純な対立軸を越えて、複層的で柔軟な意味生成へと開かれる。ここで重要なのは、多声的自己の統一は中心化によって達成されるのではなく、複数の声が相互に翻訳し合うことで生じる「動的均衡」として成立する点である。すなわち、自己の統一性とは固定的なアイデンティティではなく、異なる位置の共鳴によってその都度生成される関係のプロセスである。

この観点から、社会的対立がもたらす単一声化への抵抗は、対立そのものを静的に解消することではなく、むしろ自己内部で異質な位置が対話を再開し、多声的空間を回復することによって達成される。対話的自己論は、分断化された社会において、自己を閉塞から解放し、複数の声が同時に生きられる開かれた主体性を再構成するための理論的基盤を提供すると考える。

結 果

社会的分断がもたらす自己の単声化

分断社会において、個人は自らの立場を明確にすることを求められ、自己が単一の支持軸に還元されやすい。このとき、自己は他者との関係性から立ち上がる多様性を失い、「私は〇〇派である」「私は××に反対する」という単純化されたアイデンティティに縛られる。デリダの言う「中心」への同一化が起こり、自己は固定化された語りへと収束していく。

差延としての自己と意味の深層再接続

井筒の共時論的構造を導入すれば、主体は単一の時間的連続ではなく、多重的・同時的な意味の場の交差点として捉えられる。自己が支持／不支持の対立へと単純化されるのは、こうした深層の意味場から切断され、表層的な政治的記号へと還元されるためである。しかし、差延を前提にすれば、意味は常に未完であり、生成途上であり、単一の立場に回収されない余白を持つ。自己を差延として捉えることが、潜在的な多声性を回復する起点となる。

多声的自己の再構成と「位置の相互翻訳」

ハーマンスの多声的自己は、異なる立場・感情・価値観が「位置」として自己内部に存在し、それらが対話を行うプロセスである。社会的分断が強まると、この多声性は縮減し、一つの声が他の声を抑圧する。しかし、位置間の「翻訳」を通じて、多声的調和を再構築することが可能になる。たとえば、「政治的に対立する他者に対する怒りの声」と「共感しようとする声」が葛藤する場合、それぞれを排除するのではなく、両者の間に可能な意味連関を開くことで新たな立場が生成されうる。これは井筒の意味場の共振とも、デリダの差延の構造とも響き合う。多声性は、二項対立に閉ざされない開かれた主体の基盤となる。

結 論

本論考は、デリダの脱構築による二項対立の揺さぶり、井筒俊彦の深層の意味生成としての

「本質」論、ハーマンスの対話的自己論による多声性の構造を統合し、分断社会における主体の再構成可能性を示した。得られた結論は以下の通りである。

デリダの差延論、井筒俊彦の意識／本質論・共時論的構造、そしてハーマンスの対話的自己論を総合すると、二項対立的な自己投影を乗り越えるための統合的モデルが立ち上がる。それは、自己を単一の中心に還元するのではなく、複数の意味的層位が互いに開かれ、翻訳され、交差し続ける「多層的・多声的生成モデル」として構想できる。

デリダの差延論が示すのは、自己が依拠する意味や価値は固定的な基礎をもたず、つねに他の意味との差異と延期によって生じるという構造である。二項対立は固定的で自明の境界を前提とするが、差延の観点に立つと、その境界は常に揺らぎ、相互依存的であることが暴かれる。したがって、自己が「支持／不支持」「正統／異端」といった二極化に自らを投影することは、差延の運動を停止させ、意味生成の流動性を人工的に閉ざす行為にほかならない。このレベルで必要となるのは、自己が依拠する意味の中心性そのものを相対化し、ズレを受容する構えである。

次に井筒の意識／本質論は、社会的対立に汚染された表層意識に閉じこもることが、深層における本質的意味生成へのアクセスを遮断するという問題を指摘する。井筒のいう「本質」は、文化的・宗教的象徴体系を超えて普遍的な意味の湧出が生じる層であり、ここでは多様な意味が共時的に交錯する。二項対立はこの共時的豊かさを切断し、意識を単一の立場性に固着させる。したがって、自己が二項対立を乗り越えるには、表層意識のレベルにとどまるのではなく、自己内部の深層で多様な意味が共時的に響き合う構造へ回帰する必要がある。

そしてハーマンスの対話的自己論が示すのは、自己とは本来複数の位置から構成される多声的存在であるという思想である。二項対立が作用するとき、自己の内部で多様な位置が沈黙させられ、一つの教条的声が支配的となる。ここで重要なのは、位置間の「相互翻訳」を通じ、

自己内部の異質な声同士が対話可能性を回復するプロセスである。この相互翻訳が進むことで、自己は単一の対立軸に収斂しない柔軟な構造を取り戻す。

これら三つの理論を統合すると、二項対立的な自己投影を乗り越えるための理論的モデルは以下の三段階として整理できる。

①差延の視座による境界の相対化：自己の意味基盤を固定化する衝動から距離を置き、あらゆる立場がズレと関係性の中で生成されると理解する。②共時的深層への回帰：表層意識の対立的枠組みに閉じず、自己内部の多様な意味層が同時に響き合う深層へアクセスする。③対話的自己による再統合：多様な位置間の対話と相互翻訳を促進し、多声的で開かれた自己へと再構成する。

このモデルは、固定化された二項対立を解体し、自己を流動的・多元的・生成的なプロセスとして捉え直すことで、分断社会を生きる主体がより豊かな自己構造を取り戻すための理論的基盤を提供するものである。

分断社会は主体の語りを単線化し、自己の社会的投影を二項対立的に硬直化させる。脱構築と深層意味論を組み合わせることで、主体の内部に潜む多声的可能性を差延として再評価できる。対話的自己論の枠組みは、固定化された自己を再編し、他者性を内在化する主体の生成を支える。これら三つの理論を統合した再構成モデルは、分断を前提とした現代社会において、新たな主体性の形成に向けた理論的基盤となりうるであろう。

以上により、自己の再構成とは、二項対立の克服ではなく、多声性の生成と意味場の再接続を通じて、差延としての主体を引き受けるプロ

セスであることが示された。本論考が示す視座は、政治的分断だけでなく、文化的・倫理的対立が深まる現代において、主体が他者と共生するための理論的基盤を提供するものである。

参考文献

- 井筒俊彦『意識と本質—精神的東洋を求めて』1991, 岩波文庫
- 井筒俊彦『コスモスとアンチコスモス：東洋哲学のために』2019, 岩波文庫
- ジャック・デリダ, 足立和浩訳『根源の彼方に グラマトロジーについて上』2012, 現代思潮新社
- ジャック・デリダ, 足立和浩訳『根源の彼方に グラマトロジーについて下』1972, 現代思潮新社
- 森脇透青, 西山雄二, 宮崎裕助, ダリン・テネフ, 小川歩人『ジャック・デリダ「差延」を読む』2023, 読書人
- Castells, Manuel. The Power of Identity. 1997, Blackwell pub
- Derrida, Jacques. Margins of Philosophy. 1984, University of Chicago Press
- Giddens, Anthony. Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age. 1991, Polity Press
- Hermans, H. J. M. Dialogical Self Theory. 2018, Cambridge University Press
- Hermans, H. J. M., & Kempen, H. J. G. The Dialogical Self: Meaning as Movement. 1993, Academic Press
- Izutsu, Toshihiko. Sufism and Taoism. 1983, University of California Press
- Sunstein, Cass R. #Republic: Divided Democracy in the Age of Social Media. 2017, Princeton University Press

2025年11月27日 受稿